

越境人

2012
AUTUMN

vol. 6

コリア国際学園 広報誌

特集1

KIS後援会設立に向けた集い

・基調講演 「教育力」とは何か 鶩田清一さん

特集2

第1回フィリピン研修旅行2012

KIS生徒、「悪戦苦闘」の最高に充実した研修を経験!

■ SPECIAL REPORT

KIS、国連教育科学文化機関（ユネスコ）からユネスコスクールに認定



2 特集1 KIS後援会設立に向けた集い

- ・基調講演「教育力」とは何か 鷺田清一さん
- ・瀬戸内寂聴さんのあいさつ

8 特集2 第1回フィリピン研修旅行2012

KIS生徒、「悪戦苦闘」の最高に充実した研修を経験！

14 SPECIAL REPORT

KIS、国連教育科学文化機関(ユネスコ)から
ユネスコスクールに認定



越境人 2012年秋 第6号

・発行日 2012年9月15日
・発 行 学校法人コリア国際学園
〒567-0057 大阪府茨木市豊川2丁目13番35号
TEL:072-643-4200 FAX:072-643-4401
E-mail:contact-school@kis-korea.org http://www.kis-korea.org/

※越境人は年2回の発行です。※本誌記事を無断で転載等する事を禁じます。



速報! 大阪駅前第1ビル5階に 土地・建物・マンション等々 売却依頼募集中!



自由設計

お好きな建築プランで
お建てください。

女性設計士と建てる家

イルソーレシリーズ好評分譲中!

(社)全日本不動産協会会員 (社)不動産保証協会会員 (社)近畿地区不動産公正取引協議会加盟 ■宅建免許／奈良県知事(2)3522号 ■建設業免許／奈良県知事(般-19)14196号

分譲・仲介・新築・
リフォーム・賃貸
山崎ハウジング

<http://www.yamazakihousing.com>

検索

他にもホームページには
分譲地等の不動産情報が
多数掲載されています。
不動産のことならお気軽に
お問い合わせください。



代理店・販売協力店

MISAWA International
200年住宅 HABITA

ネットすまい
エスマーカル販売店

本社 奈良県吉野郡大淀町北野137番地の20

TEL : 0746-34-5688

橿原店 奈良県橿原市内膳町5丁目6番29号(サンリブキャトル1F)

TEL : 0744-21-7577



建学の精神

境界をまたぐ「越境人」に。

21世紀の国際社会は、グローバル化と情報化が加速する一方で、政治・経済・社会・文化のあらゆる面において、解決すべき人類共通の課題にも直面しています。とりわけ東アジアは、その集約的な地域のひとつとしてダイナミックな変化が予見される歴史的な転換期にあります。

こうした時代状況を未来に向けて切り拓いていくためには、なにより個性と多様性の尊重を基礎とした創造力の溢れる人間が求められています。言い換えれば、柔軟な発想と幅広いコミュニケーション能力を兼ね備え、問題解決能力に優れた人間の育成にほかなりません。

コリア国際学園（KIS）は、在日コリアンをはじめとする多様な文化的背景を持つ生徒たちが、自らのアイデンティティについて自由に考え学ぶことができ、かつ確かな学力と豊かな個性を持った創造的人間として複数の国家・境界をまたぎ活躍できる、いわば「越境人」の育成を目指します。

コリア国際学園（KIS）は、すべての教育活動を通じて相互の信頼と協同を深め、地域社会に根ざし、コリアにつながり、世界に開かれた国際学校として、世界と東アジアの持続可能な発展に貢献します。

教育理念

多文化共生

民族的アイデンティティと自尊感情を育むとともに、多文化共生社会の実現に向けた知識、技能、態度を身につけた人間を育成する。

人権と平和

人間の尊厳と民主主義を尊重し、世界平和を希求する普遍的価値を創造するとともに、地球的視野を持ち、持続可能な社会の構築に貢献できる人間を育成する。

自由と創造

真の自由を理解し、豊かな個性と多様性を基礎とした創造力の溢れる人間を育成する。

◆ 校章・シンボルマーク ◆



目であり
宇宙であり
太陽であり地球であり
そして みつめていて、考えていて
そして いつも ゆれている

◆ デザイン・文 ◆

黒田 征太郎 Seitaro Kuroda
(イラストレーター)

くろだ・せいたろう ● 1939年大阪府生まれ。
'92年にNew Yorkへ移住。イラストレーター
としてポスターなど幅広く活動を展開。
コリア国際学園の発起人のひとり。

◆ コメント ◆

色は 中心が 赤 (火) (光)
その外が 黄 (アジア)
その外が 草色 (地)
その外が 青 (天であり水)
としました

基調講演「教育力」とは何か
鷲田清一さん 大谷大学教授／前大阪大学総長／哲学者

いきなり結論のような話をさせていただきますが、私は「教育とは、教え育てるという他動詞で考えるものではなく、そこには子どもが勝手に育つような場所とか空間を創ることが教育だ」と、かねがね考えてきました。

エピソードを2つ紹介します。ある出版社に勤める40歳半ばの女性の編集者のお話です。幼稚園に通うお子さんが、般若心経をすらすら覚えていました。どこで覚えたか不思議だったのでですが、お葬式の時に般若心経を読むお坊さんと一緒にあって唱和するんですね。その子どもさんは丸暗記していますから、お坊さんより高い声で、先んじてお経を唱えていくので、お葬式の場なのにいたところからクスクスと笑い声が起きました。お母さんは、冷や汗をかいたとお話をされていました。

編集者のお母さんは、仏教に関する本を作つてらっしゃいました。子どもが、机の上に置いてあつた

佛の本に興味を持ち、いつも世話を来てらしたおばあちゃんに「これなに?」と聞いてきました。おばあちゃんは言葉で教えるのではなくて、仏教に関係するCDを聞かせてあげたようです。そうすると、そのお子さんがすごく関心を持つたらしく、一人でいるときに毎日毎日聞いていたら、45分のCDを丸暗記してしまったそうです。この話にはオチがありまして、子どもは般若心経の解説ごと45分を丸暗記しているんです(笑)。

もう一つは、山崎正和さん(劇作家／評論家)から直接聞いた話です。

戦前の満州で、小学校の高学年の時に受けた授業の話です。敗戦が決まって日本軍が引き上げていく過程で、どういうわけか学校の先生が一番部接収されまして、授業ができなく

なった時に、秘密の倉庫で当時教員免許もなにも持っていない残った大人たちが、みんなで相談して子どもたちのために授業を続けたそうです。山崎先生がその時に受けた国語の授業ではただひたすらマルチン・ルターの伝記を読むというだけの授業。外国語の授業では、中国語を漢文のように読み下すのではなくて、仏教に関係するCDを聞かせてあげたようです。そうすると、そのお子さんがすごく関心を持つたらしく、一人でいるときに毎日毎日聞いていたら、45分のCDを丸暗記してしまったそうです。この話にはオチがありました、子どもは般若心経の貴重な蓄音機をもつてきて「ラベルの水の戯れ」「新世界」など、自分が大好きな曲をひたすら蓄音機で聞かせた。山崎先生は、そうした授業がこれまで自分が生涯受けた教育の中で最高のものだったと述懐されています。

教育にとって本当に大切なものは何か、を伺えるようなエピソードだと思います。

教育にとって、子どもに何か直接教えるというよりも、大人の背中あるいは横から見た姿をきちっと見せることが大切です。親自身、大人自身が何かに向けて真剣に生きている姿を見せることが大事です。子どもは、自分のことをか

そこに子どもがいれば勝手に育つてしまう

越境人 特集1 コリア国際学園(KIS) 後援会設立に向けた集いを開催

「教育力」とは何か

コリア国際学園(KIS)の財政基盤の強化と会員間の親睦・ネットワークの拡充を目的にした後援会設立に向けた集いが、6月9日(土)、設立発起人の先生方も参加する中で大阪市内のホテルで開催されました。

集いの1部は、記念講演として鷲田清一先生(大谷大学教授、前大阪大学総長、哲学者)が「教育力とは何か」というテーマで1時間ほどお話されました。2部では設立発起人と参加者の懇親会が行なわれました。

設立発起人の志村ふくみさん(染織家、人間国宝)と瀬戸内寂聴さん(小説家、僧侶)、中村泰士さん(作曲家)、鈴木邦男さん(政治団体「一水会」顧問)らから心温まる激励の挨拶をいただき、この日の熱気溢れる集いを終えました。ここでは、本学園の目指すべき教育の方向性を考える上でも、きわめて示唆深い内容となつた鷲田先生の記念講演(要旨)を再録します。



◆ コリア国際学園後援会設立発起人

上田正昭(京都大学名誉教授、歴史学者)／志村ふくみ(染織家、人間国宝)／澤地久枝(ノンフィクション作家、「九条の会」呼びかけ人)／鈴木邦男(政治団体「一水会」顧問)／瀬戸内寂聴(小説家、僧侶)／徳山詳直(京都造形芸術大学理事長、東北芸術工科大学理事長)／中村泰士(作曲家)／野中広務(元内閣官房長官、元自民党幹事長)／平田オリザ(大阪大学教授、劇作家)／水谷幸正(元佛教大学学長、前学校法人佛教教育学園理事長)／李光奎(元韓国在外同胞財団理事長、ソウル大学名誉教授)／李長熙(韓国外国语大学教授)／金泰昌(公共哲学共働研究所所長、哲学者)／鄭根植(ソウル大学名誉教授)／丁世鉉(元韓国統一部長官、円光大学総長)／Tae Hoon. Oum(カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授、UPS財団チアープロフェッサー)（順不同 2012年5月現在）



次世代の子どもたちに何かを「伝える」ことの方がいいんじゃないか。

「伝える」ことの方がいいんじゃないいか。つまり、大人が痛い思いをして経験したこと、思い知ったことを子どもたちに「これだけは！絶対に！はずしたらいかんぞ！」「これだけは手放してはいけないぞ」と「伝える」こと。その大きさを山崎さんのエピソードは教えてくれているのではないか。

つまり、それぞの先生が「これだけは！」というものをしつかりと伝えようとした、その姿勢を当時の小学生は見ていたのだろうと思うんですよ。ソードは教えてくれているのではないか。



選別する」手段ですね。生涯に一度くらいは意味があると思いますが、今の子どもは、物事がついた時からずーっと「選別」というものにさらされてきた。あなたは仲間です。受け入れます。あなたは私たちに必要なこと。私にはものすごく怖く思えます。このことが、子どもたちに知られない間に不信感や自信のなさ、あるいは自分がここにいることの意味が分からぬといふうな思いを溜め込ませてきているのではないか。

司馬遷の言葉の中に「禍福は糾える（あざなえる）縄のごとし」というものがあります。

禍福とは禍と幸福ですね。幸福と見えていたものが縄の中に入り込んでいて実は不幸に反転したり、こんなに悲惨なことはないと思っていたものが幸福に反転したりとか、人生や社会とはそういうものだと司馬遷は書いていました。同じように社会の中では、しばしば善悪は反転してしまう。一筋縄ではない。

社会や人生の中で、本当に大事なこと、手放してはいけない、見失ってはいけないことというのは、実は結構多い。たとえば、国を運営していく場合も「正解」がない。構造改革

すね。昔大阪には適塾という学校があり北浜にありました。緒方洪庵が開いた医学の塾で、10年間に3千人ぐら

い全国から若い武士の子弟や脱藩した人が医学の勉強に来ていたのです。が、この学校の卒業生で医者になつた人は半分もいません。

皆さんご存知のように、一番有名なのは福澤諭吉とか、大村益次郎とか、あるいは赤十字を作った人とか。明治の日本のリーダー達をいっぱい生み出しました。この適塾で教えたのは、医学とオランダ語のたつ

た二科目だけです。だから、知識を満遍なく教えるよりも、もつともつと教育力をもつたものがあるんじゃないだろうか、と山崎さんの話から私がいつも思うことです。

教養とは世の中のさまざまな出来事に向き合った時に、4つのカテゴリーに出来事をざっくりと仕分けることができる力のこと。一番目は、

絶対見失ってはいけないもの、手放してはいけないもの。二番目に、あつたら良いけど、なくてもいいもの、あればいいが、なくてもいいもの。三番目に、端的になくていいものの。四番目に、絶対あつてはならないもの。即座にこれはこういう問題だと仕分けられることが、本当の意味で教養を身につけていることではないかと思います。仕分けとは物事の軽重、些細なことと重大なことの判断がつくということ。大人になることは、そういうことではないだろうか。私はこれを「価値の遠近法」と呼んでいます。

今、学校の教室ではほとんど「伝える」ことが起こっていないのではないか。その一番の例は、教室で先生方は「フランス革命は何年や！」とか、「この活用を言ってみろ！」とか生徒に質問しますよね。学生の学びで誰もおかしいとは思わなくなってきたことがあります。私は、試験というものがこれだけ当たり前になってしまった現実をものすごく怖く思っています。試験とは、要するに「あなたは、私たちの組織、学校、集団にはやりません」という「人を

力をチェックする質問法です。

しかし、このことをよくよく考えた時に、ものすごい倒錯したことを知っている人に聞くことが質問であります。どこの社会でもそうです。しか

し学校だけ逆の質問をします。知つてある人が、知らない人に質問する

というへんてこなことをやっている。「試し」という形をとつた「試し」。ちゃんと覚えたのか覚えてないのか人を試す言葉です。

も「あたつた！はずれた」という感覚で受けとる。本来の尋ねるという意味は、「教えて！」という懇願に対し

て「伝える」という形で応えることです。最近の教育現場は、何かとんでもない倒錯的な言葉のやり取りになつてているのではないかと思います。

もう一つ、あまりにも当たり前過ぎて誰もおかしいとは思わなくなつてきたことがあります。私は、試験

というものがこれだけ当たり前になってしまった現実をものすごく怖く思っています。試験とは、要するに「あなたは、私たちの組織、学校、

集団にはやりません」という「人を



「価値の遠近法」—ざっくり4つのカテゴリーに仕分けできる力が重要



「ああでもない、こうでもない」と今まで、考え続けるということが私は大事だと思います。

「ああでもない、こうでもない」と考えられるタフな知性のことを、私は「肺活量の多い知性」とよく言います。とても遠いところにある答えをめざして、わからぬままどれだけ長く潜り続けられるか、そういうしっかりした肺活量をもつてている知性を育てないといけない。

例えば、かつては大家族ですから、両親だけではなくおじいちゃん、おばあちゃん、おじさん、おばさん、奉公人の人もいたかもしれない。子どもが悪い成績をとつてきて、お父さんがババッと怒つても、お母さんが「でもまあまあ一生懸命やつたんやし許したりや」と言う。おじいちゃんは、そのとき息子に向かって「お前、そんな偉そうなこと言えるなあ。お前の学校の成績でどれだけ先生に嫌み言われて困ったか」と言うことで、お父さんの意見をまた相対化する。おじさんにいたつては、責任がない分、気楽に「もうええやん、泣いてるし、勘弁してやれよ」という。大人たちのポジションの違いによって意見の対立が、いつでもありました。

いままそれと向き合い、問い合わせるその知的体力を持つためにこそ必要なものだと私は思っています。

どうしてそういう力を身につければいけないのか。明治維新以降、本来私たちは、民主主義社会を構成する成熟した市民になるべく、世の中進んできたはずです。しかし、皮肉なことに私たちには、この百数十年間に市民としてどんどんどんどん未熟になってきたのではないだろうか、という思いが私に強くあります。

つまり、本当の市民になるのではなく、行政、教育、法曹、流通などさまざまなサービスを消費する顧客になってきたのではないだろうか。だから、税金やサービス料を支払っていることを理由にして、先生のサービスが劣化したとか、あるいは政治家の判断や振る舞いが劣化しているとか、郵便が遅配になつたとか、みんなクレーマーになるわけです。

本当の市民ならサービスが劣化したときそんなことはしません。「そ

「ああでもない、こうでもない」と考え方育てることが大事です。

（編集責任：広報誌「越境人」編集委員会）

後援会設立の集い懇親会挨拶（要旨）瀬戸内寂聴さん（小説家／僧侶）

人々が生きていくうえで、お互いの幸福を求めていくうえで、自分だけが幸福になつても仕方がない。地球上にいるすべての人種、すべての人が、そして子どもたちが十分にお腹一杯に食べることができ、十分に教育を受けることができる状況にならない限りは本当の幸福は訪れないと思います。そのためには、まず言葉で話し合う。話し合うことが大切で、その第一歩がこの学園の理想にもつながれば私は大変嬉しく思います。



勉強とは、問い合わせ続ける知的体力を持つためにこそ必要なものだ。

子どもの知性は、そういうところから生まれます。上等な知性ではありません。くるべて、ずる賢い知性ですけれども「いま誰の意見についていたら、うまくスルーできるか？」とかを考量する。はかりにかけて考える。これなんです。さまざま違った考え方の中、「これでもないし、あれでもない」と経験をさせることが大事でいつも共同関係にありますよね。一緒に組んで子どもを叱りつけるし、その時に「先生もこう言うてはったよ」と先生も味方に付ける。大人が意見対立をするのではなく、大人が結託して子どもに向かうかたちになつていてるんですね。そうすると、もう従うか、反発して家を出て行くか、「all or nothing」しかない。つまり、白黒しか反応しようがなくなるわけです。

子どもが、分からぬという事態に耐えて問題を捨てないで、より良い解答を目指して必死で考え続ける力は、大人がいろんな考え方をきちんと見せてあげるということです。勉強とは、分からぬものを分かるようになるためにやるのは、問い合わせともにどんどんどん難しくなつて深まっていくものです。

だから、勉強すること、学ぶということは「分からぬけど、これは大事だ」という問題に分からぬです。

あるいは偏差値などの一つの軸で並べるのではなくて、複数の評価軸をきちんと見せてあげるということは非常に大事なことです。そういう意味では、私たち自身もそうです。が、逆説的な言い方ですが「勉強」とは、まだ答えが見えない事態に耐えられるような知性の体力を持つためには、大人がいろいろな様性を子どもにメニューとして見せてやることが大事ではないかと思います。

子どもの知性は、そういうところから生まれます。上等な知性ではありません。くるべて、ずる賢い知性ですけれども「いま誰の意見についていたら、うまくスルーできるか？」とかを考量する。はかりにかけて考える。これなんです。さまざま違った考え方の中、「これでもないし、あれでもない」と経験をさせることが大事でいつも共同関係にありますよね。一緒に組んで子どもを叱りつけるし、その時に「先生もこう言うてはったよ」と先生も味方に付ける。大人が意見対立をするのではなく、大人が結託して子どもに向かうかたちになつていてるんですね。そうすると、もう従うか、反発して家を出て行くか、「all or nothing」しかない。つまり、白黒しか反応しようがなくなるわけです。

子どもが、分からぬという事態に耐えて問題を捨てないで、より良い解答を目指して必死で考え続ける力は、大人がいろんな考え方をきちんと見せてあげるということです。勉強とは、分からぬものを分かるようになるためにやるのは、問い合わせともにどんどんどん難しくなつて深まっていくものです。

だから、勉強すること、学ぶということは「分からぬけど、これは大事だ」という問題に分からぬです。

あるいは偏差値などの一つの軸で並べるのではなくて、複数の評価軸をきちんと見せてあげるということは非常に大事なことです。そういう意味では、私たち自身もそうです。が、逆説的な言い方ですが「勉強」とは、まだ答えが見えない事態に耐えられるような知性の体力を持つためには、大人がいろいろな様性を子どもにメニューとして見せてやることが大事ではないかと思います。

「ああでもない、こうでもない」と考え方育てることが大事です。

（編集責任：広報誌「越境人」編集委員会）